

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## D・H・ロレンス 生涯と作品(2)

著者	倉田 雅美
著者別名	Masami Kurata
雑誌名	dialogos
号	11
ページ	133-149
発行年	2011-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005057/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005057/</a>

## D・H・ロレンス—生涯と作品 (2)

倉田 雅美

### 生涯と作品 (1906 年—1908 年)

1905 年の夏に始まった D・H・ロレンス (David Herbert Lawrence, 1885-1930) とホプキン夫妻との関係は、その後のロレンスに多大な影響を与えることになる。ウィリアム・エドワード・ホプキン (William Edward Hopkin, 1862-1951) はロレンスよりも 23 歳年長で、ロレンスにとっては友人というよりも父親のような存在であった。若くしてイングランド中部 (Midlands)、ノッティンガムシャー (Nottinghamshire) のイーストウッド (Eastwood) に移り住んだ彼は、地元の炭鉱事務所の事務員をはじめとして様々な仕事に就き、最終的にノッティンガム州会議員にまでなった成功者だった。文学や歴史、ジャーナリズムに造詣が深いホプキンに若きロレンスは傾倒していった。向上心が強く、また、負けず嫌いのロレンスが、ある意味で彼を文芸の先達として尊敬し、また目標として励んだのは想像に難くない。初めてホプキンがロレンスを目にしたのは、乳母車の中にいた生後間もない彼だった。

私が初めてロレンスに会ったのは、というより彼を目にしたのは、1885 年で、生後数週間しか経っていない時だった。その日、私はイーストウッドのヴィクトリア通りに続く道を歩いていて、ロレンス夫人が鉄製の輪ぶちの付いた三輪の乳母車に生まれたばかりの赤ん坊を乗せて通りに出て来たのだった。私は立ち止まり、赤ん坊の具合はどうかとたずねた。夫人は赤ん坊の顔を見せてくれて、それは発育不良の、ひ弱そうな子供だった。その子を「育て」(“rear”) られるかどうかという夫人の不安な言葉が私には理解できた。後に

ロレンスは私に言うのだった。「学校に入る前、私は鼻詰まりの子供で、いつも風邪を引いていた」と<sup>(1)</sup>。

これはホプキンが当時のことを鮮明に記憶していて、初めてロレンスを見た時の印象がいかに強いものであったかを示している。文学をはじめとして哲学や考古学、歴史等の知識が豊富で、またジャーナリズムにも強い関心があった社会主義者ホプキンならではの感性和記憶力が覗えるエピソードである。当時、ロレンスをはじめとして向学心に燃える地元の若者に大きな影響を与え、その才能を育て、伸ばし、そして見守り続けたホプキン及び彼の妻サラ (Sarah, 1867-1922)(後に夫妻は離婚する)は、ロレンスとの関係を生涯に亘って持つことになる。それは互いの書簡でのやり取りであったり、また、機会をみての再会を通しての関係であったが、それは夫妻にとってよりロレンスにとって深い意味を持った関係であった。つまり、ロレンスはその後の作品で夫妻をモデルとしたと思われる人物を数多く登場させているのである。例えば、戯曲『一触即発』(Touch and Go, 1920)に登場する社会主義者のウィリー・ハフトンや長編小説『ミスター・ヌーン』(Mr Noon, 1934, 1984)のルイ・ゴダート(社会主義者で菜食主義者)はウィリアム・ホプキンがモデルであると断定できるであろうし、また、パティ・ゴダート(夫人参政権論者)はサラ・ホプキンがモデルになっていると言われている。敢えて言うならば、ロレンスの作品に登場する社会主義者やジャーナリスト、婦人解放運動の推進者、また進歩主義的知識人の原型はこのホプキン夫妻であると言っても過言ではないだろう。ロレンスが後年の諸作品に様々な論客(彼らがどのような主義を持ち、また、どのような思想を語るかは別問題としても)を登場させた背景には、ホプキン夫妻の存在があったのである。

1906年4月、ロレンスは初の長編小説「リティシア」(“Laetitia”)の第1草稿(本作品はその後、第2草稿が書かれ、引き続き「ネザミア」(“Nethermere”)第1、第2草稿が起こされ、最終的に『白孔雀』(The

*White Peacock*, 1911) として世に出る) を書き始める。「リティシア」は文学作品としての(主に構成面での)完成度は別として、既にロレンス文学特有の様々なテーマが表れているといった点で重要な作品である。物語の語り手であり主人公でもあるシ ril・ピアゾルが抱く人間存在としての「疎外感」や「喪失感」は、21歳のロレンスが抱いていた感情であり、また、シ rilと彼の恋人であるエミリー・サクストンとの恋愛感情は若きロレンスの苦悩に満ちたそれであった。農夫であるジョージ・サクストン(エミリーの兄)の持つ「本能的生命力」、また、炭鉱主一族の息子であるレズリー・テンペストの「気取った洗練さ」などは、イーストウッドに生まれ育ったロレンスの周囲に実在していた人物の実像が色濃く投影されている。物語の舞台であるエバーウィッチ(Eberwich)はまさにイーストウッドであり、ロレンス一家が親しく交際していたチェインバーズ一家(the Chambers)や地元の炭鉱主バーバー族(Barber)は、その名を変えただけの人物として物語に登場している。物語の主要な舞台であるネザミア領地の森番フランク・アナブルは、後年に執筆されることとなるロレンスの代表作『チャタレイ夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928)のメラーズの原型である。こうした特異な人物像を20年以上にも亘って懐に秘め、温め、熟成させ、そのつど作品中に投影させる技には、ロレンスの作家としての執念があり、それは気魄のこもった作家魂でもある。

物語の第2部、第2章の「春の暗雲」(“A Shadow in Spring”)でのシ rilとアナブルの邂逅は作品中でも中心的テーマが凝縮されたクライマックスのひとつである。農場がウサギに荒らされていると言い張る農夫サクストンは銃でウサギ狩りを強行するのだが、自然を愛し、サクストンの行為に反抗するアナブルは「俺の知っている害獣はただ一種類だけだ—それは口をきく生き物だ」<sup>(2)</sup>と言ってウサギ狩りを邪魔する。これを端にアナブルは村人たちから「森の悪魔」(‘devil of the woods’)と呼ばれるようになる。だが、シ rilはアナブルにとって唯一の良き理解者となる。「良き動物たれ、汝の

動物的本能に忠実であれ」(‘Be a good animal, true to your animal instinct.’)<sup>(3)</sup>と言うアナブルのモットーはシリルの信念そのものであり、そこには作者ロレンスの思想や哲学が色濃く投影されている。二人が石切り場の森で会う場面は、作者ロレンスの思想と哲学がその美文で熱く語られている。

4月の初めのある日の夕方、私[シリル]はアナブルを探しながら石切り場のある森へ入って行った。…

教会の裏から驚いて飛び出た孔雀が墓地の階段の上を羽ばたいて飛んで来たのだった。それから重い足音が敷石を横切った。森番[アナブル]だった。私が彼の知っている口笛を吹くと、彼は茨だらけのバラの茂みを掻き分けて階段を上がって来た。孔雀は私の頭上を飛び越え、古びた黒い身体を曲げた天使像の首に止まった。その天使は死んだルーシーのことを最早嘆くことはなく、また天使自身も既に死んでいた。孔雀は官能的な首をかしげ、あたりを見渡した。そして、頭を高くもたげ、叫び声を上げた。その声は暗い黄昏時の聖域を引き裂いた。枯れた灰色の草が揺れ動くように思えた。…

「あいつの声を聞くがいい！…傲慢な愚か者め！一見してみろ！まるで虚栄の台座のように天使の上に止まっている。あれは女の魂だ—または悪魔の」<sup>(4)</sup>

多くの批評家の言を待たずともロレンスの写実的な美文には定評がある。特筆すべきは短編小説“The Odour of Chrysanthemums”(1911)の冒頭だろうが、その美文ですらこの箇所ほどには構成上、重要な役割を果たしてはいない。つまり、本箇所では主人公シリルが森の教会へ入って行く場面が森番アナブルとの邂逅へと続き、その邂逅でアナブルは自らの哲学、つまり作者ロレンスの思想を代弁するといった、魅力的な手法が用いられているのである。登場人物を取り巻く自然が単に美しい文体で描写されているに留まらず、彼

らの哲学や思想、つまり作品の核心的テーマが語られる格好の舞台へと続く導入ともなっているのである。本作品ではシ ril とアナブル（二人とも作者ロレンスの代弁者と考えてよいだろう）のこの邂逅を境に、作品の中心的テーマがより明確になってくる。美文で語られる森番の言葉は、そのまま自然を賛美する作者ロレンスの嘆きであり、その後起こるアナブルの事故死（石切り場の崩壊により死亡する）は、まさに「現代文明社会における自然の喪失」を意味しているのである<sup>(5)</sup>。

「リティシア」の第1草稿が起こされ（1906年4月）、最終的に『白孔雀』として完成する（1910年12月）までロレンスは何度も改稿を重ね続けていたのだが、その間、幼友達ジェシー・チェインバーズ（Jessie Chambers, 1887-1944）との関係はかなり深いものになっていた。特に1906年から1908年にかけての二人の関係は最も濃密であったと指摘する批評家がいる<sup>(6)</sup>。ロレンスは「リティシア」を初めとして、書き溜めていた詩などを持って足しげくジェシーの実家であるハッグズ農場へ通っては、彼女の意見を求めていた。

8月、ロレンス母子とジェシーはリンカンシャーへ旅行している。ジェシーのことを決して快く思っていなかった母親リディア（Lydia Lawrence, 1851-1910）が三人で旅行したのは、おそらくロレンスの強い要望があつてのことだろう。

その前年（1905年）の2月に出た勅定奨学生試験（King's Scholarship exam.）の結果は「第1等級第1グループ」で合格というものだった。この結果、奨学生となったロレンスは正規の教員免許状を取得するためにノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ（Nottingham University College）への入学を決める。将来、教員としての安定した暮らしを望んだのはロレンス自身よりも、むしろ母親であった。炭鉱夫である父アーサー（Arthur Lawrence, 1846-1924）のような男にはなつて欲しくないという母親の強い意志がロレンスを大学進学へ向かわせたと言えよう。しかし、実際に大学へ通い始めたロレンスの思いは「幻滅」（'disillusion'）の一言に尽きるものだった<sup>(7)</sup>。「…

大学は僕に何も与えてくれなかったし、やるべき事もなかった—」(‘College gave me nothing, even nothing to do —’)<sup>(8)</sup> という不満に始まり、「僕は大学にとっても失望しました…最も驚いたのは、教授の半数が知的にも、また人格的にも僕より劣っていたことです…」(‘College disappointed me painfully… one of the cruelest shocks I ever had was to find that half the pro’s [professors] in college were not superior to me in intellect and character.’)<sup>(9)</sup> という失望を表す様々な感情が若きロレンスを捉えたのだった。だが、こうした感情は大学や教授たちそのものに起因していたというより、むしろロレンスの大学や学者に関する考え方や姿勢に因るものであったろう。今日でもある種のイギリス人が高等教育機関や、そこに所属する上流階級の人々を揶揄する時に使う ‘posh’ という言葉がロレンスから離れることはなかった。イングランド中部の炭鉱村で生まれ育ったロレンスにとって、大学という組織は優越感に浸る人々の集まる非現実的かつ生命力の欠如した世界であり、そこは彼の知る炭鉱村とはかけ離れた世界に思えたのである。大学在学中(1906年9月—1908年7月)に書かれた三編の詩、「開き直り」(‘The Worm Turns’),「勉強」(‘Study’),そして「大学の窓から」(‘From a College Window’)には、現実から遊離した大学という世界がロレンス独特の冷ややかな筆致で綴られている<sup>(10)</sup>。「僕は本にはうんざりだ…腐生植物の壤土には…」(‘I am quite sick of books…Such saprophyte mould.’) (「開き直り」),「誰が来るのか—足取りが静かな一人の労働者だ」(‘Who comes? — A labourer with still tread.’) (「勉強」), また、「…僕たちは、まるで窓辺に座る神々のように、智恵の高みから町の芝居を半ば楽しんで眺めている。」(‘…we, like gods in the window seat / Uplifted in wisdom, half amused by the play in the street.’) (「大学の窓から」) といった表現には、ロレンスの「大学」と「現実世界」との対比が、単なる観察者としてではなく、その渦中に身を置く当事者としての立場から述べられている。ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジはその後の1948年にジェシー・ブート卿(Sir Jesse Boot, 1850-1931)の資金提供により

ノッティンガム大学 (University of Nottingham) となる。その時のことをロレンスは「ノッティンガムの新しい大学」(‘Nottingham’s New University’, *Pansies*, 1929) と題する詩で次のように伝えている。

ノッティンガムの新しい大学

ノッティンガムに、あの陰鬱な町に  
私が高校とカレッジに通った所に、  
新しい大学が出来た  
新しい知識を授けるために。

壮麗で、素晴らしく  
気高い資金で  
良きジェシー・ブート卿の  
狡猾な錬金術から生まれた。

子供の頃、思いもしなかった  
私のささやかな小銭を  
ブートの現金払いの薬局のカウンターの上に転がした時、  
ジェシーが

同じような小銭を何百万も集めて  
財産を作り  
最後には壮麗で、素晴らしく  
膨らませ、花咲かせて



大学にするとは

そこでは利口な人間が素晴らしい錬金術のように薬を調剤する  
常識的な言葉を使って！

将来のノッティンガムの子供たちが

現金を調合する薬学の理学士となり

ノッティンガムの知識人は立ち上がって

ブーツのお陰で私は文学修士になった、と言うとは。

こうしたことから私には分かる、前から知っていたことなのだが  
文化は現金のクソの中深くに根を張り、知識は  
ブーツから最後に出てくるものであることが。

「新しい知識」、「気高い資金」、「良きブーツ卿」、「財産」、「文学修士」、「文化は現金のクソの中」、この詩のこうしたキーワードにはロレンスの大学という教育機関や知識人、また実業家の蓄財に対する反感や反目が強い皮肉とともに込められている。以前、ロレンスの母方の祖父とジェシー・ブーツの間に多少のいざこざがあったことをロレンスは1915年1月13日付の書簡である知人に伝えているが、こうした個人的な問題もノッティンガム大学設立に関してのロレンスの想いを増長させたと言えるかもしれない。

ロレンスは言わば「転んでもただでは起きない」性質の人間だった。ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジに幻滅し、その「腐生性」に脅かされても、こうした状況を逆手に取り、作家としての糧にして作品中に反映させ続けたのである。

1907年8月、地元紙である『ノッティンガム・ガーディアン』紙(*Nottinghamshire Guardian*)がその年のクリスマス懸賞文学作品の応募を行った。作品は3部門(1.「楽しいクリスマスの物語で一番良いものに懸

賞金3ポンド」、2.「面白いクリスマスの物語で一番良いものに懸賞金3ポンド」、3.「歴史的建造物の伝説で一番良いものに懸賞金3ポンド」)で、ロレンスは3部門すべてに応募すべく作品を書いた。1.の部門に応募すべく「序曲」(“A Prelude”, 1907)を書き、ジェシーの名前で投稿し、2.の部門では「白いストッキング」(“The White Stocking”, 1914)の最初の草稿となる作品をルイ・パロウズ(Louie Burrows, 1888-1962)(ともにイルケストンの見習い教員養成所の生徒だった女性)の名前で、さらに「ステンドグラスのかけら」(“A Fragment of Stained Glass”, 1911)の初期の草稿である「ルビー・グラス」(“Ruby-Glass”, 1911)を自らの名前で投稿した。審査結果は、「序曲」が部門1位となり、その年の12月7日付、『ノッティンガム・ガーディアン』紙に掲載されることになる(本紙はロレンスの死後の1949年12月10日にこの作品を再掲載する)。これは若きロレンスにとって多くの意味を持つ出来事であった。まず、自らの作品が地元紙に活字となって掲載されたこと、次に、本作品が「楽しいクリスマスの物語」として公認され、ロレンス自ら多少の自信を持ったことである。皮肉なことに、その後のロレンスは終生、決して「楽しい作家」であったことはなく、また彼自身そうなることを望んだこともなかった。ロレンスはスタンダール(Stendhal, Marie Henri Beyle, 1783-1842)やモーム(William Somerset Maugham, 1874-1965)のような作家とは一線を画した作家であることを自認し、また、それを誇りとしていた。あるべき作家像について、イタリアの批評家カルロ・リナティ(Carlo Linati, 1878-1949)に宛てた書簡の一部で次のように明言している。

「…書物は観察と感覚で巧みに組み立てられ、すべて完璧に仕上げられたある種の玩具であるべきだと思いますか?—私はそうは思いません。…作家というものは群集の中にいて、彼らの向こうずねを蹴って、悲しませたり喜ばせたりすべきものです。…芸術作品は、特に小説は読者が高みの見物をする小劇場ではありません—20リ

ラの入場券を買い—ため息をついたり、哀れんだり、大目に見たり、微笑んだりする神のように。…私の作品を読む人は取っ組み合いの真っ只中に入り、もしそれが気に入らなければ—安全な客席にいたいのなら—他の作家の作品を読めばいいのです。』<sup>(11)</sup>

こうした主張にはロレンスのまるで求道者のごとき作家魂が垣間見られるが、ロレンスはそれを意識することもなく、生涯に亘って「玩具でない書物」の執筆に拘った。大学の窓から見える外界を「高みの見物」の対象としてではなく、その中へ入って行き、取っ組み合い、真の世界を見るべく苦闘したのである。ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジでの学生時代が、教員免許状を取得したこと以外には意味がなかったとする批評家の指摘とは相反して、ロレンスが得た成果は多大なものであった。その後の作家活動において執筆した多くの作品の萌芽はこの時期すでに見られるものであったし、何よりもこの時期の経験がロレンスを人間としてより大きく成長させたのである。3ポンドの賞金を獲得した「序曲」については、ロマンスに満ちた「楽しいクリスマスの物語」に終始しているにしても、この作品の登場人物に読者はシリルやエミリー、ジョージやレティス（同時期に書かれた「リティシア」の主人公たち）の面影を見るのである。

冬、ロレンスはアリス・ダックス (Alice Dax, 1878-1910) を通してブランチ・ジェニングズ (Blanche Jennings, 1881-1944) と会う機会を持つ。ジェニングズはリヴァプールの郵便局に勤務する女性で、熱烈な女性参政権論者だった。また、アリスもリヴァプール出身の女性で、イーストウッドの薬剤師ハリー・ダックス (Harry Dax) と結婚し、思想的に社会主義を信奉し、また、ブランチ同様に女性参政権論者であった。ロレンスは二人に「リティシア」の第2草稿について意見を求めていることから、ジェシー・チェインバーズ同様、作品の批評を当てにできる女性として見ていたのだろう。特にアリスは、その後の6年間に亘る親密な関係からしてロレンスにとって極めて重

要な存在であったと言える。

1908年はロレンスにとり転機となった年である。6月から7月4日まで続いたノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジでの教員免許資格試験を終え、免許状を取得した彼は、さっそく職探しを始める。しかし、希望であったノッティンガムでの教職は見つからず、心配する家族やジェシーを思い必死に勤め口を捜す毎日であった。ノッティンガムでの就職を諦めた彼は、リヴァプールをはじめストックポート、更にはエジプトにまで応募の手紙を出す。ブランチ・ジェニングズ宛ての手紙で、「エジプトに就職先を求めて手紙を出しました。直ぐに見つかるかどうかはそれ程気にしていません。」<sup>(12)</sup>と書いている。アモス・ヘンダーソン教授 (Professor Amos Henderson) とジョージ・ホウルダネス (George Holderness) の推薦の甲斐もなく教職に就くことは困難だった。その最大の原因は、当時、イングランドでは教職課程を終えた大学生の数が増加し、正教員としての採用枠が限定されていたからである。ヘンダーソン教授はロレンスの文学的才能を認めていた人物であり、また、ジョージ・ホウルダネスとは1902年10月にロレンスがイーストウッドの英国学校で見習い教員として教え始めた時からの知り合いだった。二人ともロレンスの才能を認めていながらも、その推薦もむなしく、ロレンスの教員応募に対して返ってくる返事は、「貴殿の応募に沿いかねることを謹んで御通知申し上げます」<sup>(13)</sup> というものだった。

9月26日、ロレンスはロンドンの南部にあるクロイドンで面接を受け、デイヴィッドソン・ロード小学校 (Davidson Road School) での採用が決まる。だが、当時のイギリスでは近代国家に向けての様々な政治改革が進行中で<sup>(14)</sup>、4月にアスキス (Herbert Henry Asquith, 1852-1928) 率いる第1次政府が発足し、また、女性参政権運動が始まり、学校教育制度に関してもいくつかの改革案が出され、検討が始められていた。だが、その改革案の実現も進まないまま、現場の公立学校には未整備のままのイギリス社会の実態が暗い影を落としていた。ロンドンというイギリスの中心地域にあるデイヴィッドソン・

ロード小学校には、大都市として発展途上にあったロンドンの混乱がそのまま反映されていたのだ。養育院に暮らす孤児や役者の子供たち、履く靴さえ買えない貧しい家庭の子供たちなど、様々な環境に置かれた児童が小学校にはいた。牧歌的な故郷のイーストウッドとは違った世界で教鞭を取るようになったロレンスの悲痛な思いが、どれ程のものであったかは想像に難くない。こうした経験が彼の作品に大いに反映されているのは当然のことである。だが、ロレンスにとって重要であったのは、こうした職場環境での経験もさることながら、ロンドンでの生活で得られた人間関係、人脈、そして都会ならではの文化に接することが出来たことだった。ロレンスは機会を見つけてはロンドンの美術館や博物館、図書館や劇場に通った。また、下宿先のジョン・ウィリアム・ジョーンズ夫妻 (John and Marie Jones) や職場の同僚教師アグネス・ハウルト (Agnes Holt)、女友達のヘレン・コーク (Helen Corke) との出会い、そして何よりも、イギリス文壇へのデビューを願っていたロレンスが文芸誌『イングリッシュ・レビュー』誌 (*English Review*) の編集者フォード・マドックス・フーファー (Ford Madox Hueffer, 1873 - 1939) (後に姓をフォードと改名) と知り合いになったことで、彼の人生は一変したのである。職業作家としての新たな人生が開かれたのである。

**D・H・ロレンス年譜 (1906 年—1908 年) 及び本論考で扱った人物**

1906 年 (21 歳) 英国学校の教員として教え続ける傍ら、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ入学のための「前納授業料 20 ポンド」を蓄える。ウィリアム・ホプキン夫妻の家に出入りし、様々な知的刺激を受ける。4 月、初の長編小説「リティシア」の第 1 草稿（後に『白孔雀』として出版される）を書き始める。8 月、母親、ジェシーとともにリンカンシャーへ旅行する。9 月、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジに入学し、教員免許状取得を目指す。

ジェシー・ブート卿：ノッティンガム出身の実業家。農夫であった父親ジョン・ブート (John Boot) は 1849 年にノッティンガムに薬局を開く。その後、ジョン・ブートは事業を拡大し、息子ジェシーの代にブート家はイングランドでも屈指の実業家一族となる。ノッティンガム大学設立に関わる土地や資金の援助をし、地元に対して多大な貢献をする。

1907 年 (22 歳) 大学在学中、三編の詩（「開き直り」、「勉強」、「大学の窓から」）を書く。6 月、『白孔雀』の第 1 草稿を書き終える。8 月、母親、ジェシーとともにヨークシャーのロビン・フッツ・ベイへ旅行する。10 月、『ノッティンガム・ガーディアン』紙のクリスマス懸賞文学作品に「序曲」（ジェシー・チェインバーズの名前で）、「白いストッキング」（ルイ・バロウズの名前で）、また「ルビー・グラス」を自らの名前で応募する。「序曲」が部門 1 位となり、12 月 7 日付、『ノッティンガム・ガーディアン』紙に掲載される。冬、アリス・ダックスを通してブランチ・ジェニングズと会う。

カルロ・リナティ：イタリアの批評家で、ロレンスの中編小説「狐」(“The Fox”, 1920) 及び「てんとう虫」(“The Ladybird”, 1929) をイタリア語に翻訳した。また、イタリアの雑誌『コリエレ・デラ・セラ』誌 (*Corriere della Sera*) にロレンスについての批評を掲載している。

アリス・ダックス：熱烈な社会主義者であり女性参政権論者であった彼女は、ウィリアム・ホプキンの家に出入りしていた頃、妻のサリーを介してロレンスと知り合いになる。ロレンスに会った彼女は、一目惚れし、その後、二人の関係は深いものとなった。8歳年下のロレンスが初めて肉体関係を持った女性であると言われている。1912年にロレンスがフリーダと出会うまで、二人の関係は続いた。ロレンスに女性の肉体的、官能的魅力を経験させたという点で重要な女性であった。『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913) のクララ・ドウズのモデルとなった。

ブランチ・ジェニングズ：社会主義者で女性参政権論者であった彼女は、アリス・ダックスを介してロレンスと一度だけ会ったと言われている。ただし、書簡のやり取りはその後も続いた。ロレンスは「リティシア」の第2草稿について彼女の助言を求めた。

1908年(23歳) 7月、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジでの教員免許資格試験を終え、免許状を取得する。職探しを始めるが、地元ノッティンガムに就職先は見つからなかった。8月、母親、ジェシーとともにヨークシャーのフラムボローで休暇を過ごす。9月、ロンドンの南部にあるクロイドンで教員採用面接を受け、デイヴィッドソ

ン・ロード小学校での採用が決まる。冬、ヘレン・コークに出会い、その後、深い関係になる。(1912年まで二人の関係は続いた。)

アモス・ヘンダーソン教授：ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジの学部長。ロレンスに様々な忠告を与えた人物で、学位修得課程に進むよう助言したり、ラテン語の教授を申し出たりした。

### [註]

- (1) Edward Nehls. ed., *D.H.Lawrence: A Composite Biography, Vol. I.* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1977), p.21.
- (2) D.H.Lawrence. *The White Peacock* (London: William Heinemann LTD, 1966), p.172.
- (3) *ibid.*, p.173.
- (4) *ibid.*, pp.174-5.
- (5) 倉田雅美、『ロレンス—人と文学』(東京、勉誠出版、2007)、p.92.
- (6) Keith Sagar, ed., *A D.H.Lawrence Handbook* (New York: Manchester UP, 1982), p.194.
- (7) John Worthen. *D.H.Lawrence: The Early Years 1885-1912* (Cambridge: Cambridge UP, 1991), p.168.
- (8) *Loc.cit.*
- (9) *Loc.cit.*
- (10) 以下、三編の原文を掲げる。

There is no passion in my life, / There is no action, it is almost a sleep. /  
 Oh for a delirium of love or of strife / Or sorrow to weep.  
 I am quite sick of books / Give them to the old / My chafed curbed blood



no longer brooks / Such saprophyte mould.

No readings and writings / While the blood is alive / But lovings and  
hatings, struggle and fightings — / I'll work and I'll wive. ('The Worm  
Turns')

Close by the wood's edge there's a girl hovers / Looks through the hazel  
screen out on the meadow / Where, wheeling and screaming the petulant  
plovers / Wave frightened. Who comes? — A labourer with still tread. / Oh,  
sunset swims in her eye's swift pool./ (I curse myself for a studying fool.)  
('Study')

Remote although I hear the beggar's cough / See the lady's rose-lit fingers  
hold him a coin: / These are fragments of an incoherent play, and we scoff  
/ As we look at the actors, and say in our souls we will never join / Their  
ill-played drama, we, like gods in the window seat / Uplifted in wisdom,  
half amused by the play in the street. ('From a College Window')

- (11) James T. Boulton, ed., *The Selected Letters of D.H.Lawrence* (Cambridge:  
Cambridge UP, 1997), p.289.
- (12) *ibid.*, p.16.
- (13) Worthen. p.201.
- (14) 倉田雅美, p.28.

\* 本論考で扱った人物の詳細（生没年など）について、「D・H・ロレンス  
—生涯と作品 (1)」(*dialogos* 第10号、英語コミュニケーション学科紀要、  
2010) に既出したものは省略してある。

## [参考文献]

- Booth, Howard J. ed. *New D.H.Lawrence*. Manchester: Manchester UP, 2009.
- Boulton, James T. ed. *The Selected Letters of D.H.Lawrence*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Cowan, James C. *D.H.Lawrence's American Journey*. Cleveland: The Press of Case Western Reserve University, 1970.
- Daleski, H.M. *The Forked Flame*. Evanston: Northwestern UP, 1965.
- Fernihough, Anne. *D.H.Lawrence: Aesthetics and Ideology*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Hyde, V.C. and Ingersoll, E.G. eds. *Terra Incognita: D.H.Lawrence at the Frontiers*. Cranbury: Rosemont Publishing & Printing Corp., 2010.
- Kinthead-Weekes, Mark. *D.H.Lawrence: Triumph to Exile, 1912-1922*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Meyers, Jeffrey. *D.H.Lawrence: A Biography*. New York: Vintage Books, 1990.
- Nehls, Edward. ed. *D.H.Lawrence: A Composite Biography*. Madison: The University of Wisconsin Press, 3 vols. 1957-59.
- Poplawski, Paul. *The Works of D.H.Lawrence: A Chronological Checklist*. Nottingham: D.H.Lawrence Society, 1995.
- Poplawski, Paul. *D.H.Lawrence: A Reference Companion*. Westport: Greenwood Press, 1996.
- Sagar, Keith. ed. *A.D.H.Lawrence Handbook*. Manchester: Manchester UP, 1982.
- Worthen, John. *D.H.Lawrence: The Early Years, 1885-1912*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Wuchina, Douglas. *Destinies of Splendor: Sexual Attraction in D.H.Lawrence*. New York: Peter Lang Publishing Inc., 2009.